



校長便り（職員編）

呉市立阿賀小学校
安宗 誠

体育科授業の「分かった・できた」のために

体育科授業の「分かった・できた」のために必要なことは？

まず、その**技能の本質がどこにあるのかを指導者がしっかり捉える**ことです。しっかり捉えるとはどういうことでしょうか。

たとえば、ハードル走。ハードルを踏み切って着地するとき、踏切位置からハードルまでの距離とハードルから着地位置までの距離の比は2：1です。そのようになっているときに、振り上げ足をまっすぐ伸ばした状態で踏み切ることが可能となり、上下動の少ないまたぎ越し方ができるのです。指導者がいくら「ハードルを低く跳び越しなさい！」と声かけをしても、「どうすればそれができるのか？」ということを指導者がしっかり捉えていないと、児童は何となく練習するというレベルにとどまってしまうですね。

次に、その**技能の本質が習得できる場を指導者が工夫・設定**することです。このような場を児童自身に考えさせる授業展開も時にはあってもよいと思いますが、基本的には指導者が工夫・設定すべきです。プロスポーツの世界でも必ずと言ってよいほどコーチがいて、手取り足取り、場を工夫・設定しながら指導していますよね。

例えば、先述のハードル走の2：1を習得させるための場の工夫とは・・・，

○単元のはじめの段階で、自分自身（児童）がどこで踏み切り、着地しているのか、ペアの相手に観察させ、赤玉を置かせて振り返らせるということがあっていいですね。（私はかつてそういう授業を時々やっていました。）

○踏切地点、着地点に目安となるものを置いていました。（私はフラフープを活用していました。）

○振り上げ足がまっすぐになるフォームを習得させるために、ハードルのバーに足裏を当てるための厚紙を貼り付けた練習の場を設定していました。

・・・といった感じです。

こういったことにこだわる大切さは、何も体育科だけに限ったことではありませんね。

意欲的に鉄棒運動に取り組んでいる阿賀っ子
の様子。

逆上がりの技能の本質は、この辺りを

めがけて足を蹴り上げることと、その勢いで腕力も加えて鉄棒の下腹回りまでグッと引きつけることです。

